半世紀前からの贈り物

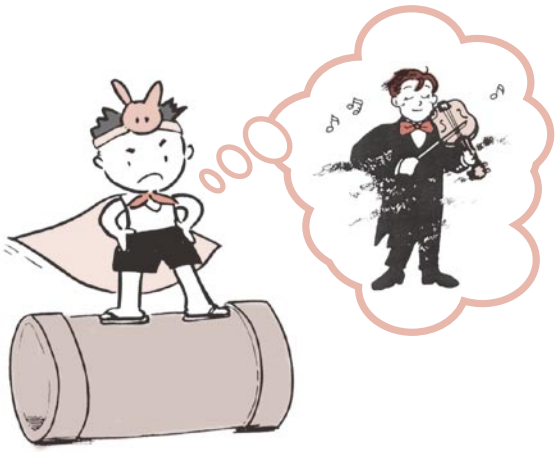
＝今、蘇る「文集」＝

蒲郡市民間大使
内田雅敏プロフィール
蒲郡町生まれ
東京弁護士会所属
著書「乗っ取り弁護士」、「これが犯罪？ビラ配りで逮捕を考える」など多数

前号までのあらすじ

思いもかけず内田氏に届いた小学2年のときの文集。

文集を開くと、同級生たちの懐かしい文章が目に飛び込んできました。いろいろなテーマごとに書かれている文集を読み進むうち、当時の同級生の顔が、一人ひとり浮かんでくると同時に、走馬灯のように出来事が思い出されます。



汽車についてはこんな一文もある。

きしゃ

きしゃがきてきをならして、プラットホームについた。みんながきしゃからおりてしまうとボーッときてきをならした。きしゃがはしっていったプラットホームはだんだん小さく小さくきえていきました。

（H・N男児）

〈プラットホームがだんだん小さくなって消えていく〉という表現はなかなかのものだ。そう言えば《今は山中、今が浜、今は鉄橋渡るぞと、思うまもなくトンネルの闇を通って広野原～》という歌があった。

H・Nは田舎町の当時としては珍しかったのだが、幼稚園のころからずっとバイオリンを習っており、後に芸大に進み、今、NHK交響楽団でバイオリンを弾いている。先日も演奏会に招待された。小学校のころから将来の目標を定め、それに向かって真っ直ぐに進むというのは大変な努力を要したことと思う。立派なものだ。「ある意味では賭けであった。」と本人の弁である。

小学4年生のときのことだ。H・Nと一緒に保健室の掃除をしていたところ、6年生の男子が2人入ってきた。そのうちの1人が大きな図体をしていながらはなを垂らしていたので「あいつ、6年生なのにはなをたらしている」と耳打ちしたところ、H・Nがいたずら心を起こし、わざわざ6年生に言い付けに行った。それは今風に言えば、藤子不二雄のまんが「ドラえもん」の中で、スネオがジャイアンにのび太のことを言い付けに行くのとそっくりな光景だった。それを聞いた《ジャイアン》が「何だと！」と怒り、今にもつかみかかろうとしてにらんできたので、慌てて窓から校庭に逃げ出した。運悪く、そこを女性教師が通りかかり見つかってしまった。この担任とはどうも相性が悪く、よく立たされたりした。「この子は何をやらしてもダメだ」などと言われたことさえあったが、よくグレなかったものだ。

もっとも、当時の私は先生にこのような言葉を吐かすほど可愛げのない「ワル」だったということにもなる。しかし、それにしても教師が吐いてはいけない言葉ではなかったか。そう、思い出したことがある。作文の時間に、父と弟の3人で山仕事（父が小さな山林を持っており、日曜日などはよく手伝いにかり出された）を終え、夕刻月の出はじめたころ、大八車を引きながらの帰途、10円玉を1つ拾ったので、それで「タンキリ飴」を買い、なめながら家に戻ったと書いたところ、この教師は『拾ったものを勝手に使ってはいけません』と書いてきた。『お手伝いえらいね』といって欲しかったとまでは思わないが、《拾ったものを・・・》はないであろう。ついでにもう1つ。授業の中で図書館に行って本を見る時間というのがあった。小説―子供向けダイジェスト版だが―を読んでいたところ、そういうものを読むのではなく、もっと調べ事などをと言われた。思い出しているうちにまた腹が立ってきた。

（つづく）